

短編小説翻訳の試み

黒 澤 純 子

愛知東邦大学

短編小説翻訳の試み

黒澤純子*

1. はじめに
2. 翻訳とは
3. 方法
4. 翻訳が困難であった事項
5. 翻訳を終えて
6. 試訳

1. はじめに

この研究ノートでは、A大学にて筆者が半期15回で行った翻訳の授業の内容、そしてその成果としてその試訳を掲載する。授業報告というカテゴリーにも入る可能性もあるが、研究ノートとした理由は、私たちが翻訳する際、どのような事項に注意を払って時間をかけたのか、特に、英語と日本語間にある隔たりを少しでも縮めようと学生と共に考えた足跡を記していること、そして今後も継続していく研究としての翻訳という意味を考慮したからである。

2. 翻訳とは

この授業で試みる翻訳は、専門家を目指すものではないが志は専門家の志と同じである。翻訳について、そして翻訳者の任務について成瀬氏の言葉を引用する。

解釈者としての翻訳者の任務は、まず原文の意図に正しい評価をくだし、その価値を訳文のなかに正しく再現するための仲介者になることでなければならない。そこに求められるのが、ふたたび、たんに原文と訳文のあいだの情報上の等価だけでなく、あくまで両文の読者の理解内容間の等価を実現することである。

(成瀬、1996, p.7)

私たちが目指す翻訳は、成瀬氏が主張する「理解内容間の等価を実現すること」であり、それ

* 愛知東邦大学非常勤講師

は私たちにとって誤訳がなく、文脈と状況に合った語の選択を慎重にすること、そして時には説明を加えた訳をして私たちにとって、そして私たちの試訳を読んでもくれる読者にとっても理解しやすい訳にすることだった。

さらに私たちのクラスでは、時間的な制約もあるため、一つの短編小説を読み進めることができるまで丁寧に訳すことだった。翻訳する際、私たちは物語の時代背景、登場人物たちの様子、言動、考え方など、私たちが現在身を置いている時代と文化においても理解しやすいように日本語に置き換えていくことに注意を払った。そのために私たちはまず原文を見て、文の構造をおさえることから始めた。テキストの一文が長く、修飾語が長いので、主語と述語はどこにあるのか、なぜ現在形ではなく、現在完了形になっているのかなど、時制の違いに着目して訳のニュアンスの違いも考慮した。さらに、俗語を使用している会話の部分から、発話者の職業や年齢にも関連性が見出すことができるような訳をすることを試みた。さらに、単語一語一語を丁寧に確認して直訳し、その訳を見返して、よりわかりやすい日本語にするために語を入れ替え、原文の品詞を変えて訳すなど、思考を重ねて小川氏の言う「言葉の横すべり」(小川、1997, p.154)のような訳にならないよう心がけた。

3. 方法

3.1. 授業内容と進め方

対象クラスは、英文学科2年生以上の専門科目のクラスで、履修者は2クラス、計43人であった。この授業は教職の授業としても選択できるため、履修者の内1人は3年生であった。テキストはイギリスの作家、トーマス・ハーディの短編、*To Please His Wife*を使用した。テキストの選択の理由は、英文学科の学生にとって適切な難易度と内容であること、また卒業するまでには是非読んでおきたい作家の作品であること、かつ時間をかけて翻訳することは勉強になる作品だと講師が判断したからであった。

授業の進行形態は、履修者全員がテキストの翻訳を分担し、担当者が訳を発表する形式をとった。担当者の訳はパソコンで作成して事前にその訳を講師に提出した。講師がクラスの全員に担当者の訳を配布し、担当者の訳の発表後講師とクラスの全員で担当者の翻訳を吟味し、修正を加えていった。担当者以外も各自でテキストの予習をしているため、まず誤訳がないか、基本的事項を確認し、語の選択が正しいか、またより良い表現がないかなどの意見交換を行った。

初回の授業でアンケートを採ったところ、43名中41人の学生が2年時まで原文で短編あるいは長編の小説を読んだことがないという結果が出た。そのため、講師は進度について考慮した。一回の授業ではたくさんのページを進めることは目標にはせず、じっくりと原文に向き合うこと、時間をかけて意見を出しあい、読み進めていくことにした。その結果、一回の授業では、テキストを1ページから1ページ半を進める程度となった。また、一文が長いいため、時には適切な長さで担当者に分担することは難しかったが、担当量は一人あたり60語前後であった。最終的に14回

の授業で進んだのは16ページ強である。誤訳なく文脈に則した語の選択、そして物語として読みやすい日本語にするために、訳を検討する時間を要したため、この短編を最後まで訳すことはできなかった。しかし、授業の目標は達成できたと考えている。

また、この授業では、学生の一人一人の意見や感想や質問を受けるために、リフレクションシートを準備した。A4判の用紙を使用し、14回分の表の項目に、(1)テキストの予習をどれだけやったかの自己評価(%で表示)、(2)感想、質問、意見、その他、(3)講師からのコメントの欄を作成した。(1)の欄は、学生の予習の具合いと、その日の授業の理解度を比較して自己分析を行ってもらうための項目欄とした。(3)の欄は、(2)で学生が記入したことに対し、フィードバックすることが重要だと考え設けた。また、学生が授業中に聞き落とした訳や質問など、他の学生の前では尋ねづらいことを講師に確認する場としても活用して欲しいという思いから作成した。その結果、リフレクションシートを通して講師と学生が会話をするかのような形態となった。

3.2. 成績評価

担当者が担当する訳とその解説についての発表(30%)と筆記試験(70%)と授業中の意見交換時の参加の状況によって総合的に成績を評価した。ページによっては訳の担当量が平均以上に長い場合があったが、学生は自主的にそのような箇所も担当してくれた。さらに、担当を決める際、難解な文章が含まれているかどうかの判断がつかない場合もあったが、その場合は講師が学生の発表する訳を評価する上で、学生間で不公平にならないよう配慮した。筆記試験については、授業中に特に重点を置いて説明した文章を中心に出題した。

4. 翻訳が困難であった事項

4.1. 状況の把握：物語の始め

物語は、冬の曇り空の日曜日、教会での礼拝が終わり会衆がその場から立ち上がり、帰ろうとしている様子から始まる。この最初の1ページの中に、教会の内部を描写する用語に加え、牧師、教会書紀、会衆がそれぞれどのような行動をとっているのかを理解するのは学生たちにとって難しかった。普段は学生がほとんど目にしない単語、“nave”「(聖堂の)身廊」、 “chancel-step” 「(聖堂の)内陣の階段」の意味を辞書で調べるだけでなく、ここでは教会の内部構造を大まかに把握する必要があった。テキストの英文に沿って講師が教会内の図を描き、加えて建物の方位を確認した。すると、“... the clerk going towards the west door to open it.”の訳は「教会書紀は西の扉の方へ行った」と訳すよりも、「教会書紀は、会衆が出入りする出入り用の扉の方へ行った」が読者にとってわかりやすい訳になることがわかった。

さらに、教会に現れる船乗りが“middle of chancel-step”「内陣の階段の真ん中」にひざまづいて、“facing the east”「東の方を向いて」、という場面が続く。出版されている翻訳の中には、

「東を向いて」という訳もあるが、この場合読者は方角を確認するだけである。ここは単に「東」ではなく、上記で確認した教会内の図から、船乗りは説教台の正面の階段の真ん中にいること、そして祭壇の正面を向いていることを導き出す必要がある。この部分の訳は、直前に描写されていた教会の出入り口の扉が西にあったことに注意し、反対側の方角の東が教会正面であることを訳者が導き出すことが必要な箇所であった。

4.2. 見落としがちな文法事項

ここでは原文を訳していく中で、学生にとって見落としがちな重要な文法事項を3つ挙げる。まず、分詞構文の見落としがあり、正しい訳ができなかった箇所があった。例えば、4ページの“Soon the sailor parted also from Joanna, and, having no especial errand or appointment, turned back towards Emily’s house.”の文である。“having”に気づき、“Although he had no especial...”と、分詞構文にする前の接続詞を使った表現がわかると、「特別な用向きや約束はなかったが」と、つながる文である。同様に分詞構文が出てくる文は、7ページの“Moved by an impulse of reluctance to meet him in a spot which breathed of Emily, ...”、そして9ページの“Reaching home she burnt the letter, and told her mother that...”であるが、いずれも分詞構文を見落として、日本語訳に接続詞がなくわかりにくい訳をつけていた箇所だった。

次に、仮定法のIfが省略されることで、語順が変わる文である。主語と動詞が倒置している箇所にも注意が必要であった。14ページの“Possibly, had she found the least cause for jealousy, Joanna would almost have been better satisfied.”の文で、ifが省略されて主語と動詞が入れ替わっていることに気づけなかったため、Joanna以下の従属節と主節がつながらない訳になっていた。

最後に、形式主語のitが使われている文である。5ページの“... and it was soon rumored about the quay that old Jolliffe’s son, who had come home from the sea, was going to be married to the former young woman, to the great disappointment of the latter.”では、that節が真の主語であるが、その節の中に関係代名詞がコンマでくくられた句が挿入されているため、訳しにくい文であったようだ。この文ではさらに、that節の主語、動詞を指摘した上で、“the former young woman”, “the latter”がそれぞれ誰を指すのかは重要なため、時間をかけて確認した。

上記の文法の見落としをした理由は、未知の単語、あるいは既習の単語であっても文脈に沿わない意味になってしまうことの焦りと、とにかく訳さなくてはいけないという気持ちが強かったからであろう。その焦りが文の構造をじっくりと見ずに訳し、その結果文法を見落とした訳につながってしまったようだ。上記の箇所を訳し終えた授業日では、高校で学習した文法が大変重要だと再確認した、と多くの学生がリフレクションシートに書いていた。

4.3. 単語の意味の選択

学生たちが普段よく使う単語とその意味ではこの短編を訳す時には有効でなかった例を紹介する。まず1ページに出てくる“clerk”は「店員」ではなく、文脈から「教会書紀」にしなければならない。教会に現れる男“sailor”の訳は、「水兵」、「船長」、「船乗り」と担当者が変わるたびに、まちまちに訳されていたが、最終的には「船乗り」で統一した。5ページの“intelligence of the deep sorrow”の“intelligence”をどう訳すかについてはいくつか意見を交換した。原文前後の文脈と辞書を確認し、「情報」とした。続いて6ページの“a five minutes’ absence of the proprietor counted for little”では、“counted”が「数える」ではなく、「重要である」という意味であること、さらに、“little”が否定の意味であることに注意した。

また、12ページに出てくる、“nautical arts and enterprises”の“enterprises”を「企業」という意味を選択すると訳は文脈に全く則さず、日本語に訳しても何のことを指しているのかわからない。ここでは、「航海の技術と冒険」と訳した。さらに、辞書から適切な意味を選択することとは別に、日本語の言葉の選択に苦労した箇所が“widower”である。単語の意味は、「おとこやもめ」であるが、その日本語自体を耳にしたことがない学生たちにとっては、日本語の辞書でその意味を確認することが必要だった。

ここで分かったことは、辞書で単語を調べ意味の確認をする時、学生たちはまず一つ目に掲載されている意味を訳に使用していることが多いということだった。日本語が通じないような訳になる時は、もう一度原文に戻ること、そして原文と訳文を読み比べて訳文を読み返した上で、再び辞書にあるすべての意味に目を通す必要があることを学生たちは実感できたと思う。

さらに私たちは登場人物たちが話す言葉を説明する副詞、前置詞句にも注意した。ジョリフ夫妻が生活について話をする時、ジョアンナの口調は、“sadly”, “bitterly”, “in stern sadness”であるのに対し、シェイドラックは“cheerfully”, “good-humouredly”という様子で話している。二人の言葉の口調には温度差があり、彼らの生活に対する充足度が表れている箇所であった。会話がある場面では、登場人物の言葉の後に使われている副詞に注意し、各々の人物の気持ちを汲み取った言葉にするように工夫した。会話の口調も、登場人物の年齢と職業、地域特有の訛りも考え、可能な限り日本語訳に反映させることを心がけた。

4.4. 長文

テキストの一文は全体的に長く、コマでつながっている文を接続詞でつなぎながら理解しやすい訳をつけることは困難であった。たとえば、2ページ目で船乗りが感謝の祈りを捧げようとする場面を描写する文は、59語である。また、その船乗りのことを町の人々が認識する場面を描写する文は27語、そして引き続き42語と46語から成る文が続いている。このような長い文は各ページにあった。一番長い文はテキストの13ページで、ジョリフとジョアンナが営んでいる食品雑

貨店内の様子、そしてジョアンナがどのように店内で働き、店の外でも顧客と関わっているのかを描写する二つの文であった。まず一文目は85語、次に続く文は93語であった。このページでは、当初予定していた担当の量よりも多くなり、誤訳なく理解しやすい訳をつけるために担当者は時間を要した。

4.5. 地図の確認

テキストを読み進める際、講師が準備した地図のコピーで2箇所を確認した。まず冒頭のページでは、“the dark figure of a man in a sailor’s garb appeared against the light” が現れた。その場では、船乗りの男の背が影になり、会衆が男の顔を認識することはできなかった。しかし、男が牧師に祈りを捧げてもらい教会を出る時には教会の扉がある西方に日が沈んでいく頃だった。沈んでいく日の光が教会を出て行く船乗りの顔を照らし、町の人々はその男のことを思い出す場面で疑問が出た。礼拝は夕方近くまで続いていたのか、という疑問であった。私たちは原文から礼拝の長さを知ることはできないが、この話の季節が冬であることを思い出した。ここで、講師が準備した地図のコピーを使用し、イギリスが高緯度の位置にあり、冬の日照時間が短いことを確認した。訳には直接に書くことはできないが、早い時間に日が落ちている様子が理解できた。

さらに、私たちはテキストに出てくるニューファンドランド島の場所を確認した。シェイドラックが若い頃に船乗りになり、ニューファンドランド島での貿易に関わっていたこと、また彼が結婚後、生活のために再び出航する場所である。ただの地名として読むのではなく、イギリスからニューファンドランド島までがどのくらいの距離であるかを認識することは大切だからである。シェイドラックが携わり、そして再び携わろうとしているのは遠洋航海であり、一旦陸に上がって生活したシェイドラックの決心がいかに大きなものかを知るためであった。そのことについて文字として訳す機会はなかったが、地名から読み取れる言外の意味を確認することで、シェイドラックの航海が容易でないこと、またそれを知った上で夫を海に送り出す妻の強欲さを認識する手がかかりとした。

5. 翻訳を終えて

毎回の授業後に提出してもらいリフレクションシートを読むと、文法の読み落としから発生した誤訳や、単語の意味の取り違いがあったことなど、毎回学生たちは何らかの発見と反省をしていた。様々な過程を経て、私たちが気づいたことは、英語力に加え、母語における語彙の豊かさや文章の表現力が何よりも必要だということだった。

短編を翻訳するにあたり、単語ひとつひとつの意味を文脈と照らし合わせて一番適切な意味を選択すること、そして文法に注意を払いながら日本語に訳していくこと、さらにその訳を何度も読み返し、わかりやすく洗練した文章にしていく作業に時間と忍耐、そして思考力を必要とした。

それらを振り返り、教育における翻訳の意義をCook (2010) の言葉に見出した。以下に引用する。

... translation has an important role to play in language learning – that it develops both language awareness and use, that it is pedagogically effective and educationally desirable, and that it answers students needs in the contemporary globalizes and multicultural world. (p. 155)

(翻訳は言語を学ぶ中で重要な役割を果たす。つまり、それは言語の気づきと言語の使い方を向上させるものであること、そして教育上有効で、教育的にも望ましいことである。そしてそれは現代のグローバル化している世界、そして多文化世界において学生たちの必要性に応えるものである。筆者訳)

6. 試訳

ここでは半期15回の授業¹を進めて完成した訳を掲載する。担当者の訳をできる限り活かし、かつ、クラスの全員で考え修正した箇所、講師が大幅な修正を加えた箇所もあることを付け加えておく。

1

ヘイヴンプール・タウンの聖ジェイムズ教会の室内は、冬の午後の重苦しい雲のもと、しだいに暗くなり始めていた。日曜だった。ちょうど礼拝が終わったところで、説教壇にいた牧師は両手で顔を覆い、会衆は礼拝から解放され、ほっと吐息をもらして席から立ち上がって帰ろうとしていた。しばらくはあまりの静けさのため、港の砂州の向こうから波の音が聞こえるほどだった。ほどなくその静けさは、教会書記が会衆のために西側の扉をいつものように開けに行く足音でかき消された。しかし、教会書記が扉に着く前に外から扉の掛け金がはずされた。すると逆光に船乗りの服装をした男の黒い影が現れた。

教会書記は脇へ寄り、その船乗りは静かに後ろ手に扉を閉めた。船乗りは堂内の身廊を前進し、内陣の階段のところまで立ち止まった。会衆のためにたくさんの祈りをしたあと、今度は自分自身のために祈りを捧げていた牧師は立ち上がって侵入者をじっと見つめた。

「ごめんください」と船乗りは会衆のみんなにも聞こえるようにはっきりとした声で牧師に言った。

「私は難破からかろうじて逃れることができたことへの感謝をするため、ここにやって来ました。それが適切なことだと存じておりますが、間違っているでしょうか？」

牧師はしばらく黙っていたが、やがてためらいながら言った。

「それは勿論間違っていないです。ただそのような願いは礼拝の前に申し出るのが普通なのです

が。そうすれば、一般感謝の時に適切な言葉を捧げられますから。しかし、しげから逃れたあなたの場合はお望みならば、『一般祈祷書』の中の海上で用いられる決まった形式の祈祷を読むのはいかがでしょうか」

「ええ、結構です。私は細かいことはとやかく言いませんので」と船乗りは言った。

そこで教会書記は、ただちに祈祷書中の感謝祈祷のあるページを船乗りに教えた。そして船乗りはその場でひざまずき、牧師の後に続いて一語一語、はっきりとした声で復唱した。こうした成り行きに、会衆は驚き静まりかえったまま機械的に船乗りと同じようにひざまずいた。しかし彼らは、人目も気にせず内陣の階段の中央でひざまずいたまま正面を向き、帽子を自分のそばに置いてお祈りをする船乗りを遠くから見続けた。

船乗りがお祈りを終えて立ち上がると、会衆も同時に立ち上がり、一緒に教会から出た。船乗りが教会から出てくると夕日が船乗りの顔を照らし、すぐに会衆はその船乗りは数年間ヘイヴンプールで見かけていなかった若い男ジェイドラッグ・ジョリフだと分かった。彼はこの町に生まれたが、両親は彼がかなり若かった時に亡くなった。そのために、彼は早くから船乗りになり、ニューファンドランドとの貿易に関わっていた。

彼は歩きながら、誰かれとなく話をし、何年も前に生まれ故郷を出て以来、沿岸航海用の2本マストの帆船の所有者兼船長になり、嵐に遭い幸運にも彼と船が助かったことを聞かせた。やがて彼は、自分より先に教会から出ていった二人の女性に近づいた。彼女たちは、彼が教会に入ってきた時身廊に座っていて、彼の行動を興味深く見ていた。その後彼女たちは一緒に教会の外に出ても彼のことについて話をしていた。

一人は細身でおとなしい感じの女性で、もう一人の女性は背が高く大柄で、落ち着いた感じの女性だった。ジョリフ船長は彼女たちの緩い巻き毛、背中や肩、かかとに至るまでしばらくの間見ていた。

ジョリフは近くの人に「二人の女性は誰ですか？」と小声で尋ねた。

「背の低い女性の方はエミリー・ハニング、背の高い方の女性はジョアンナ・フィッパードですよ」

「おお、そうだ。彼女たちを今思い出したよ」ジョリフは彼女たちの近くへ進み、二人に気づかれないようにじっと見つめた。

茶色い目を輝かせながら船乗りは「エミリー、おれのことを覚えていないかい？」とにこにこしながら、とび色の瞳を彼女に向けて言った。

「はい、覚えていますわ、ジョリフさん」とエミリーは恥ずかしそうに答えた。

もう一人の女性は黒い瞳で彼をまっすぐ見ていた。彼は「ジョアンナさんの顔はよく思い出せないな。だけどあなたの幼い頃や身内の人たちは知っているよ」と続けた。

彼らは一緒に歩きながら会話をし、ジョリフは自身が経験した先の命拾いした話の詳細をエミリー・ハニングが住んでいたスループ通りの曲がり角に至るまで語り続けた。そして、曲がり角に着くと、エミリーはにっこりと笑ってうなずくと家へと帰って行った。まもなく、ジョリフは

ジョアンナとも別れた。そして特別な用事や約束があった訳ではなかったが、彼はエミリーの家の方へと引き返した。彼女は自称会計士の父親と一緒に住んでいた。けれども、彼女は父の何だかよく分からない仕事の穴埋めをすべく、小さな文具店を営んでいた。ジョリフが家に入ると、エミリーとその父がちょうどお茶をしようとしているところだった。

「おっと、お茶の時間だったとは知りませんでした」と彼は言った。「ああ、私も喜んで一杯いただきます」

彼はお茶の場に居座り、そのあともずっと航海の冒険談をした。数人の隣人たちが話を聞くために立ち寄り、部屋に入るよう招き入れられた。どういわけかエミリー・ハニングはその日曜の夜、船乗りに惚れた。そして1、2週間のうちに彼らの間に暗黙の了解ができあがった。

翌月のある月夜、シェイドラックは東へ延びる長い一本道を歩いていた。お洒落な家が建つ小高い郊外に来たとき、一もしこの古い港の近くにお洒落だといえるものがあるとすればの話だが一彼は前を歩いている人を見つけた。後ろを振り向く様子から、それをエミリーだと思った。しかし近づくと、彼女がジョアンナ・フィッパードだと気づいた。彼は愛想よく挨拶をし、彼女と並んで歩いた。

「離れてください」と彼女は言った。「でない、エミリーが嫉妬するわ」

彼は彼女が言ったことが気に入らなかったようだった。そしてそのまま彼女と並んで歩いた。歩いている間に何を話したのか、何が起こったのかシェイドラックははっきりと思い出すことができなかった。しかし、ジョアンナは自分よりおとなしくて若いライバルからうまく彼を引き離れた。このことがあってから、ジョリフはますますジョアンナ・フィッパードの後を追っているのがよく見かけられ、エミリーと一緒にいるところを見られることが少なくなった。海から戻ってきたジョリフ家の息子がジョアンナと結婚しようとしていて、エミリーはとてものがっかりしている、と間もなく波止場で噂されるようになった。

この噂が世間に広がった直後、ジョアンナはある朝、仕度をして小さな横丁にあるエミリーの家に向かった。シェイドラックを失って、エミリーが大変嘆き悲しんでいる噂は彼女の耳にも届いていた。そして、彼を奪い取った事に対してジョアンナは自責の念に駆られていた。

ジョアンナはその船乗り十分に満足しているわけではなかった。彼女は彼の慇懃な態度を好み、また結婚と地位にも憧れていた。しかし、決して心から彼のことを愛していたわけではなかった。ひとつには、彼女が野心家であった事が原因であった。彼の社会的地位が彼女と釣り合わなっていなかったし、そして女は器量が良ければ、自分よりずっと身分が上の者とでも結婚することができると思っていた。ジョアンナはエミリーがシェイドラックのことで意気消沈しているのなら、彼女の元に彼を返してもいいと前からずっと思っていた。そのために、ジョアンナはシェイドラックに別れの手紙を書き、手に持っていた。そして、もしエミリーがとても苦しんでいることを確信したら、その手紙を投函しようと思っていた。

ジョアンナはスループ通りに入り、歩道より少し低いところにある文具屋に入って行った。エミリーの父親はいつ行っても昼間のこの時間は不在で、ジョアンナが呼んでも返事がなかったの

で、店にはエミリーもいないようだった。めったに客が来なかったので、店主が5分いなくてもたいしたことではなかったのだ。ジョアンナは小さい店の中で待った。その店でエミリーは、仕入れた商品の貧弱さを隠すように、わずかな価値の品物を品よく一女というものは、そういうことが得意なものだが一並べていた。そして、ジョアンナは、窓の外で立ち止まっている人影が6ペンス本、紙の束、紐で吊るされた版画などに明らかに見とれているのに気づいた。シェイドラック・ジョリフ船長だった。彼はエミリーが店の中に一人にいるかどうか確かめるためにじっと中を見ていたのだ。ジョアンナは、エミリーの匂いがする場所で彼に会うのは気が引けたので、奥にある居間に通じているドアをすり抜けた。彼女はエミリーと仲が良かったので、以前から遠慮なく頻繁にその家に勝手に出入りしていた。

ジョリフは店に入った。ガラスの仕切り壁を遮る薄いブラインドを通して、彼がエミリーを見つけれないことにごっかりしていることが分かった。彼は店から出ようとしていたまさにその時、使いから急いで帰ってきたエミリーの姿が戸口に現れた。ジョリフの姿をみて彼女はまるで再び店の外へ出るかのように引き返した。

「逃げないで、エミリー！」彼は言った。「何を怖がっているんだい？」

「私は怖がっていないわ、ジョリフ船長。ただあなたに突然会ってびっくりしたんです」

エミリーの声は彼女の心臓が他のどこよりも跳ね上がっていることを表していた。

「おれはただ通りすがりに立ち寄っただけだよ」ジョリフは言った。

「紙でも必要なんですか？」エミリーはそう言って急いで勘定台の後ろに行った。

「違うよ、そうじゃないんだ、エミリー、なぜそんなところに隠れるんだい？なぜおれのそばに来ないんだい？君は私を嫌っているように見えるよ」

「嫌ってなんかいません。どうしてそんなことができますよう」

「それならそこから出てきて欲しいんだ。人間らしく話ができるように」

エミリーは時より笑みを浮かべながら彼の言葉に従った。彼女は再び、店の空いたところにいる彼のそばに立った。

「いい子だ」彼は言った。

「そんなことを言うてはいけませんわ、ジョリフ船長。その言葉は誰か他の人に向かって言うべきですから」

「ああ！言いたいことは分かるよ。しかし、エミリー、君がおれのことを気にかけていたとは今朝まで少しも知らなかったよ。でないと、おれはあんなことをするべきではなかったよ。おれはジョアンナをととも気に入っている。でも始めから、彼女はおれのことを友達以上には思っていないことを知っているよ。そして今、私の妻になるようお願いすべき人がわかったんだ。分かっているよね、エミリー、長い航海から帰ってきたら男はこうもりみたくによく目が見えないんだ一女の人たちに接しても、その違いが分からないんだ。彼女らは彼にとって美しく、みんな似ていて、男はたやすく手に入る方を選ぶんだ。相手が自分を愛しているかどうかを考えずに、その相手以上の他の人をすぐ愛すかもしれないと考えないで。最初からおれはおまえが一番好きだ

ったんだ。でもおまえはとても内気で引っ込み思案だったから、おまえはおれにつきまとわれたくないんだと思って、それでジョアンナの方へいったんだ」

「それ以上言わないで、ジョリフさん、やめて」と、むせるように彼女は言った。

「あなたは来月ジョアンナと結婚します。これはいけなことです。これは、これは」

「ああ、エミリー、私の可愛い人！」彼は叫び、彼女が気づかないうちに彼女の小さな体を両腕で抱きしめた。

ジョアンナはカーテンのうしろで真っ青になり、視線をそらそうとしたができなかった。

「おれが男として結婚するつもりで愛する女性はおまえだけだ。そして、ジョアンナが言ったことからすると、彼女は喜んでおれと別れてくれるだろう！彼女はおれよりもっと身分が上の人と結婚したいことを知っている。そして親切心から「はい」とおれに言ったんだ。彼女のような美しく背の高い女性は平凡な船乗りの妻には合わない。おまえはおれの妻に合っているんだよ」

彼は何度も彼女にキスをした。彼女のしなやかな体は彼の抱擁で震えた。

「ジョアンナはあなたとの関係を解消してくれるかしら？本当にそう思うの？だって—」

「彼女はおれたちを不幸にしようとは思ってないよ。彼女はおれと別れてくれるだろう」

「ああ、本当に、本当にそうして欲しいわ！これ以上ここにはいないで、ジョリフ船長！」しかし彼はなかなか立ち去らず、客が1ペニーの封蝋棒を買うために来店するまでぐずぐずしていた。それから彼は立ち去った。ジョアンナはその光景を見て嫉妬で青ざめていた。彼女は逃げる方法を探した。エミリーに自分が訪ねてきたことを気づかれずに抜け出すことは絶対必要なことだった。彼女は忍び足で店から廊下を通り、そしてそこから家の裏戸へ行って、そこから物音をたてずに通りへ出た。

その抱擁の光景を見てジョアンナは決心を一変させた。彼女はシェイドラックを手放すことができなくなった。家に着くと彼女は手紙を焼いた。そして、もしジョリフ船長が訪ねてきても、彼に会うにはあまりにも気分が優れないから会えない、と母に告げた。しかし、シェイドラックは訪ねてこなかった。彼は自分の気持ちを率直な言葉で述べた手紙を送り、そして彼女が彼におわせた数々の言葉は友情のようなものだったことをよいことに、婚約を取り消すことを許してもらえないかと頼んだ。港と島の向こうを見渡し、シェイドラックは返ってこない返事を宿でずっと待っていた。その不安に耐えられなくなったので、暗くなってから彼は本通りへ出かけて行った。彼は自分の運命を知るために、ジョアンナの家を訪ねないわけにはいかなかった。

彼女の母は、娘があまりにも体調が悪く、彼に会うことができないと言い、彼の質問に対し、彼からもらった手紙が影響し、娘を深く傷つけたと言った。

「フィパードさん、あなたはひょっとして、その手紙の内容をご存知ですか？」と彼は聞いた。フィパード夫人は知っていることを認めた。そして、その手紙の内容が彼女たち親子を非常に苦しい立場に追いやったと付け加えた。するとシェイドラックは罪悪感の大きさに恐れをなし、もし彼の手紙がジョアンナを傷つけたならば、それは誤解によるもので、彼はその手紙が彼女にと

って安堵となるものと思っていたと説明した。

もしそうでないのなら、自分は約束を守り、あの手紙は書かれなかったものと考えてください、と言った。

その翌朝、彼はジョアンナから伝言を受け取った。夕方の集会からの帰りに家まで連れ帰って欲しいということだった。彼はそれに従って彼女を連れて帰った。彼女が彼の腕を組み、公会堂から彼女の家に向かって歩いている間、彼女が言った。「私たち、前の頃と全く変わらないでしょう、シェイドラック？ あなたはあの手紙を間違えて送ったんでしょう？」

「前と全く同じだよ」彼は答えた。「君がそう言うなら」

「そう願っているわ」彼女はエミリーの事を考えながら、きつい顔つきになって呟いた。シェイドラックは、信心深く誠実で、約束を自分の命と同じように尊重する男だった。やがて、結婚式が執り行われた。彼はエミリーに、ジョアンナの気持ちを冷淡なものだと思っていたが、それは自分の思い違いであったとできるだけ穏やかに伝えた。

2

結婚して一ヶ月後、ジョアンナの母が亡くなり、その夫婦はとても実리적인事柄に注意を向けなければならなかった。彼女は両親に置き去りにされてしまうと、彼女は夫が再び海に行くという考えには耐えることができなかった。しかし、「彼は家で何ができるのか」という疑問があった。結局、彼らは本通りの当時のれんと商品が売りに出されていた小さな食品雑貨店を継ぐ決心をした。シェイドラックは商売のことは何も知らなかったし、ジョアンナもほとんど知らなかったが、彼らは商売について学ぶことを望んでいた。

彼らは食品雑貨店の経営に全力を注ぎ、大きな成功もなく、何年も店を営み続けた。二人の息子が彼らの元に産まれた。彼女は夫のことを一度も情熱的に愛したことはなかったが、母は息子たちを偶像崇拜的というくらいまで愛した。彼女は子どもたちの将来への心くばりと世話に彼女の全てを惜しげもなく与えていた。しかし、店は繁盛せず、彼女の息子たちの教育や職業に対して抱いていた彼女の夢は現実に直面して小さくしぼんでいった。息子たちが受けた学校教育はごく普通だったが、海の近くに住んでいたため、彼らの年頃の子どもたちが魅力的に思える航海の技術や冒険に魅かれて成長していった。

ジョリフの結婚生活の大きな興味は、自分自身の現在の家庭生活を除いて、エミリーの結婚のことだった。目立つものはかえって見過ごされ、思いがけない片隅に潜んでいるものが見出されるという奇妙な偶然によって、控えめなエミリーは町で繁盛している男やもめで、彼女よりもいくつか年上である商人に見初められた。最初、彼女は決して誰とも結婚することができないと断言していた。しかし、レスター氏は静かに辛抱して待ち、最後は気の進まない結婚の同意を彼女から得た。この夫婦にも二人の子どもが産まれた。そして子供たちはすくすく育つにつれて、エミリーは自分がこんなに幸せに暮らせるとは思ってもいかなかった、と言った。

その立派な商人の家は、古い町並みの中で身動きがとれないほどくっついて建てられた壮大で頑丈な煉瓦作りの邸宅の一つであった。本通りに面していて、ジョリフの店のほぼ真向いにあった。そして、純粋な嫉妬心から妻として座を奪ったその相手の女性はかなり裕福な地位から、埃にまみれた棒砂糖の塊、たくさんの干しぶどうや小さな缶に入った茶などを陳列した質素な飾り窓の向こうから見下ろしているのを見ていることが今やジョアンナの苦痛となった。

ジョリフとジョアンナの食品雑貨店は徐々に衰えていったので、ジョアンナは店を自身で切り盛りしなければならなかった。道の向かいにある広い客間に座っているエミリー・レスターがジョアンナがカウンターの後ろでけちな客でも快く迎え、客の言いなりになって動き回っているのを見ていると思うと、傷つき屈辱を感じた。またジョアンナは道で会ったその客たちに礼儀正しくしていなければならなかった。一方で、エミリーは彼女の子供たちや女家庭教師と一緒に町の上流階級の人々や近所の人々と交流していた。これが、ジョアンナが心から愛したこともないシェイドリック・ジョリフという男にエミリーを愛させなかったことで得たものだった。

シェイドラックは人の良い、正直な男であった。そしてジョアンナに対して気持ちの上でも行動の上でも忠実だった。彼は息子たちの母、ジョアンナに献身的な愛を注いだので、時間は彼のエミリーに対する愛を無力にした。彼は衝動的な以前の恋慕を自然に忘れていき、エミリーは彼の目には友人でしかなくなった。エミリーの彼への気持ちも同じだった。もしエミリーにほんの小さな嫉妬でもみつけたなら、ジョアンナはかなり満足したであろうが、エミリーとシェイドラックが二人の間の結末に完全におとなしく従ったので、ジョアンナの不満はますます募っていった。

シェイドラックは多くの小売店と競い合っただけの商売を発展させるだけの小賢い抜け目なさを持ち合わせてはいなかった。辛抱強い外交員が無理やり食品雑貨店主に仕入れさせた卵の代わりに「驚くべき代用品」について客が尋ねたら、彼は答えた。「プディングに卵を入れずにその味を味わうのは難しいですね」と。そして、彼が「本物のモカコーヒー」とあるのは本物のモカコーヒーかと尋ねられた時、彼はつらそうに言った。「小さな店ではそのように了解されているんですよ」と。このように、裕福になる方法はこの商売からではなかった。

ある夏の日、道の向こう側の大きなレンガ造りの家が、暑苦しいほどの太陽の熱の照り返しを店の中に投げ込んでいた。店にはジョリフとジョアンナ以外誰もおらず、ジョアンナはエミリーの家の扉を見ていた。そしてそこに、ある裕福な訪問客の馬車が止まった。近頃のエミリーの仕草から、シェイドラックとジョアンナの店をひいきぶる様子が見て取れた。

「正直なところ、シェイドラック、あなたは商売人ではないわ」彼の妻は悲しげにつぶやいた。「あなたは商売というものを仕込まれて育てられなかったし、男が飛び込んでやった仕事で出世するなんて不可能なことだわ。あなたがこの仕事に飛び込んだようにね」

ジョリフはその他すべてのことと同じように、このことについても彼女の言葉に同意した。「金を儲けたいなんてこれっぽかりも思っているわけではないんだ」と彼は陽気に言った。「おれは十分幸せだ。おれたちはなんとか暮らしていくことができるから」

ジョアンナはついたてのように立ち並んだ漬物の瓶越しに、立派な家をもう一度見た。

「なんとか暮らしていける…そうね」彼女は苦々しく言った。「でも、昔はとても貧しかったエミリー・レスターが今はどれだけ裕福かわかるでしょう！彼女の息子たちは名門校に通うでしょうよ。教区学校に通わないといけない自分の息子たちのことを考えてよ！」

シェイドラックはエミリーに思いを馳せた。

「ジョアンナ、君がおれから離れるようエミリーに警告し、あのちょっとしたおれたちの愚にもつかぬざれごとを終わらせ、その結果、レスター氏が現れた時、彼に「はい」と結婚の返事をエミリーが言う力を残してあげるほど、君は彼女に誰よりも親切だったろ」と彼は機嫌よく言った。

この言葉はジョアンナを激怒させた。

「過去の話はしないで！」彼女は真剣な調子で言った。「もし、あなた自身のためでないなら、息子たちや私のためと思ってちょうだい。お金持ちになるために何をすべきなのかを」

「そうだな」彼は真面目になって言った。「実を言うと、おれはいつも自分にはこの仕事は向いていないと感じていたが、そのことを言いたくはなかったんだ。友達や近所の人達の中にいるよりも、手足をもっとゆっくり伸ばす開放的な空間の中で手足を使って水をかきたいと思っている。もしおれが自分自身の方法でやってみたら、他の奴らと同じぐらい金持ちになれるのに」

「是非そうして欲しいわ！あなたの言う方法は何なの？」

「もう一度海へ行くことさ」

船乗りの妻として半ば未亡人の暮らしのような生活を嫌って、ジョアンナシェイドラックを家に引きとめていた当の本人だった。しかし、彼女の野心は自らの本能を抑え、そして言った。

「海に再び出る方法でなら、成功するって本当に思っているの？」

「もちろん。他に手はないと思っているよ」

「シェイドラック、あなたは海に行きたいの？」

「それを望んではないよ。今ここの、家の居間でおれが見出すような幸せは海にはないよ、ジョアンナ。正直言って、おれは海に対して今までも、そしてこれからもこれっぽっちの愛もないんだ。でももし、君や子供たちのための財産の問題となると話は別だよ。おれのようなはえぬきの船乗りにとっては海に戻るのが一番いい方法なんだ」

「稼ぐのに長くかかるの？」

「そうだな、状況によるよ。長くかからないかもしれないし、かかるかもしれない」

翌朝、シェイドラックはタンスから彼が最初に海から帰ってきてからの数ヶ月間に着ていた航海用のジャケットを引っ張り出し、シミを払い落とし、それを着こんで波止場まで歩いて行った。以前ほどではないが、港はまだニューファンドランド貿易で相当な商売をしていた。彼が全財産を投資してブリグ型帆船の共同所有権を買い、船長に任命されるまでは、それほど長くはかからなかった。数ヶ月間沿岸貿易に従事し、その間にシェイドラックは食品雑貨店をしていた時代に蓄積した陸の錆を払い落とし、そして春になると、そのブリグ型帆船はニューファンドランドに

向けて出航した。

ジョアンナは息子たちと暮らしていた。彼らは今たくましい若者に成長し、港と波止場界限でのいろいろな仕事に従事していた。

「気にするのはやめよう。彼らを少しばかり働かせておこう」息子たちに甘い母親は独り言を言った。「今は私たちの苦しい生活が息子たちを港界限で働かせているけれど、シェイドラックが家に帰ってくる頃には、息子たちはまだ17歳と18歳なんだから、彼らを港から離し、教育は完全に家庭教師に引き受けてもらいましょう。息子たちはおそらくエミー・レスターの大切な2人の子どもと同じくらい、代数やラテン語を身につけた紳士になってくれるでしょう」

注

1. 授業の第1回目はオリエンテーションの時間も入っているため、実質約1時間の時間を授業にあてた。

引用文献

- 小川高義 (1997) 「小説の翻訳 日本語の得意技」川本皓嗣、井上健編『翻訳の方法』東京大学出版会
高見幸朗 (2001) 『ハーディ短編集』 *To Please His Wife and Other Stories* 成美堂
成瀬武史 (1996) 『英日英 翻訳入門』研究社出版
Cook, G. (2010). *Translation in language teaching : An argument for reassessment.* (Oxford : Oxford University Press.)

受理日 平成29年9月28日